

## 『LESSON×BOARD』 - 浮葉裕司

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

冷え切った教室で、私は今日も彼を待っている。呼吸が白い息になって、かじかんだ手に、息を吹きかける。顔を上げると、目の前に、お目当ての彼が現れた。うちの制服にカーディガン姿の彼は、とても寒そうには見えなかった。羨ましい限り。ぜひ私にその上着を貸してくれ。そう言ったら君はきっと、できないねって、鼻で笑うだろうけど。

最近になって、私たち二人は誰もいない教室でこっそり会って、話しをするようになった。と、それだけ言うとロマンチックだけど、残念ながら、実際のところ、二人の間に広がる会話には、ロマンチックの欠片もない。

「しかし僕は思うんだよ。最近の人間の道具に対する扱いはひどすぎるって」

会って早々、彼は私の目の前で熱弁し始めた。というより怒っている。これはかなり溜めこんでいるな。どうやら今日は愚痴を聞くことになりそうだ。

「何があったの？」

「あの悪ガキども。普通中学生にもなって黒板にチョーク投げつけるとかあるか？」

「しょうがないよ、中学生なんてそんなもんだよ」

私はそう投げやりな返事を返す。どのクラスにも、数人はそういう奴がいる。まだ子供なのだ。すると彼はこう切り返した。

「そういう問題ではないよ。いくら中学生だって、それは常識というものだろう。」

『道具を大切に』って、小学校で習わなかったかい。まったく、君から友達にも言っておいてくれ」

うぐ、正論だ。多分みんな小一の初めに教わった。そして犯人のうち一人は確かに私の友達だ。友達として、これは本当に心が痛む。彼に対して申し訳なきを覚えながらも、私は彼の怒りを鎮めようとした。

「でもさ、いるんだよ。そういう子供みたいな奴。大体、今までそれくらいのことする奴いなかったの？」

「やめろ、悪しき記憶がよみがえ蘇る」

そう言うと彼はふさぎ込んでしまった。諭すつもりだったのに、言い返す形になってしまい、おまけに図らずも彼のトラウマを呼び起こしてしまつたらしい。彼は私の横でしょんぼり。見た目によらず彼は打たれ弱かった。私の中にいよいよ罪悪感が芽生えてきたが、そんな私の横で、今日の彼はすぐに立ち上がる。そして私に向き直り、また反論を始めた。予想以上に気が立っているみたいだ。

「いや、でも本当に勘弁してもらいたいね。見てよこれ、チョークめり込んでる」

そう彼はまた、襲撃の跡を指しながら語り出す。そう言われて黒板を覗き込むと、なるほど白い塊がきれいにこびりついている。私は黒板消しを持ってその部分を拭いてみる。

「取れない」

普段の板書のように、拭けば簡単に消えるものではなかった。

「これだから人間は」

彼はそう、侮蔑の意を持って呟いた。彼の口からこんなトーンは聞いたことがない。どうやら相当だ、今日は。

「シミになったらどうするつもりなんだ奴ら。呪ってやる、末代まで呪ってやる」

「あんたが言うとしゃれ洒落にならなくて怖い」

月明かりが少し当たって、彼のシルエットが見えた。制服のズボンにははいているけれど、いつも通り、足首がない。ついでに、今は暗くてよく見て取れないが、実は彼は半透明。私は彼に触れられない。そんな彼は真顔で言い返した。

「痛かったんだって。僕は鋼鉄で出来てるわけじゃないんだから。例え相手が石灰の塊であれ、痛いものは痛いんだ。人間はそここのところを分かってほしいね、君みたいに」

私には、人間ではない友達がいる。いつも黒板の中から現れて、黒板の中に帰っていく、私の大切な話し相手。

そもそも、なぜ「黒板」との会話が成立し得たのか。残念ながら、詳しい理由はよく分からないのだ。気になっていろいろ調べてみたところ、「やおよろず八百万の神」とか「アニミズム」とかそれっぽい単語はヒットしたものの、肝心の真相が闇の中。手がかりすら口々に掴むことができなかった。ある日しび痺れを切らして、肝心の「黒板」本人を問い詰めたところ、

「僕は自分のことを化身みたいなものと推理するね。黒板の化身。幽体離脱とは……少し違うかな。最も、本当はどうか、なんて知らん」

と言いつつ放たれたので真相の探求はもう諦めて、彼の言う通り黒板の化身で、霊的存在と思うことにした。化身、怨霊、もしかしたら、彼の否定した幽霊。彼の正体がどれにしても、この世にいるはずもない存在であることに変わりはないのだ。せめて、悪霊ではないことを祈ろう。

初めて彼と話したのは、十月中旬のある日までさかのぼる。放課後の教室に私一人で、窓にもたれかかって考え事をしていた時のこと。ちなみに考え事は進路のことだった。志望校に対して、頭の出来が悪い、という受験生共通の悩みの種。その日、少し前に受けた模試の成績表が返ってきたのだ。その成績表は表情一つ変えずにこう語る。

「第一志望 T高校普通科 偏差値四一 判定E 判定Bまであと偏差値が二三ポイント必要です。志望校を再考しましょう」

目の前が真っ白になっていく。確かに勉強してこなかったのは事実で、三年夏まで部活中心、勉強はさぼり気味の生活を送っていた。しょうがないじゃん、部活楽しいんだもん。勉強つままないんだもん。

しかし突如、勉強する必要に迫られた。第一志望校を変えた。そこに行きたい理由が生まれた。ただし、その高校は、明らかに自分の学力に合っていない高レベル校だった。

これはどう考えてもまずい、と夏休みになり一念発起、自分なりに頑張ってみた。「夏を征す者は受験を征す」って言われて、「そんなうまくいくわけが」と疑いながらもその言葉に乗ってみた。その結果がこれ？ 夏の思い出が走馬灯のように流れ出し、頭の中では『蛍の光』が流れ出す。それと合わせて焦燥感が、激流となって渦を巻く。奇妙な気持ちが生まれる。

でも、まだ、目標とはお別れしたくない。

よし、と気合を入れて自分の席に戻る。最近、学校で残って自習をするようになった。家には誘惑が多いから。特に布団、あいつは強敵だ。あの抱擁感には勝てる気がしない。あれこそ神の生まれ変わりだろう。布団に寝れるという一点だけで、きっと日本人は幸せだ。

神様の姿を思いながら席に着くと、前の黒板に、授業でやった数学の答案が残っていた。ああ、日直が消し忘れたな。代わりに消しといてやるか、と思い黒板の前に立つ。黒板消しをクリーナーにかけて、答案を消していく。

ふいに、思った。何年も板書を書かれ続ける黒板が、もしもそれを記憶していたら、そいつは教科書より賢いのでは、と。黒板の擬人化を考える。少し堅物、でも可愛い女の子が出来上がった。こんな子なら、ぜひ友達になりたいな。

「黒板と話せたら、頭良くなるかな。きっと面白いだろうな、そういうの」

そう呟いて、バカバカしい、できるわけじゃないか、と自分に苦笑いした、その時。

「ホント、話せたらいいのに」

どこからか、声がした。私の全身に、脳に響くように声が届く。慌てて周りを見渡しても、他には誰もいない。おかしい、そんなはずは。私が周りを見渡すと、また声がした。

「僕はここさ。君の目の前。黒板だよ、僕は」

そう声が聞こえてすぐ、黒板の中から半透明のものが「ぬによーん」と出てきた。それは百七十センチくらいの、若い男の姿をしていた。目も、耳も、口もある。そしてなぜか、ここの制服を着ている。姿形は確かに人間だ。でもそれは、完全に、この世のものではなかった。だって、黒板から出て来たのだから。

私はただ茫然となった。怖い。嘘だ。ありえない。逃げなきゃ。どこに？ どこでもいい、早く。

逃げろ！ 早く！ と思っても、足が震えて動かない。抜けた腰が立ってくれない。生まれて初めて目の当りにした非現実に対し、体は金縛りにあったように動いてくれなかった。そうしている間にも、「黒板」と名乗る人間もどきは、腰を抜かした私に構わず話し続ける。

「いやあ、まさか人間と本当に話せる時が来るなんて。嬉しいなあ！ 夢が叶った！ ずっと話し相手がいなくて退屈していたんだよ！」

彼が喜んでいることだけは分かった。けれど、私に向けられる声は、耳には入ってもほとんど頭に残らない。視界がわずかにもうろう朦朧としている。頭の中がはんらん氾濫状態。いま私の前で、何が起きてるの？ 私は、どうなってしまうの？ そんな私を気にする素振りもなく、彼は嬉々として話し続ける。

「出会って早々で悪いけど、君にお願いがあるんだ。僕は人間のことがもっと知りたい。僕の話し相手になってくれないかな？」

その先の記憶はおぼろげで、正確には覚えていない。どうやって私はその場から逃げ出したのか？ どう家に帰ったのか？ 分かることは、無意識の中で、「黒板」の頼みに対してなぜか首を縦に振っていたことくらいのものだ。

これが、私と彼、「黒板」の出会い。

その後二週間の間、私はずっと彼を無視し続けていた。気が動転していたとはいえ、自分から彼の頼みを許容しておいて。その時の私はきっと、応じれば逃がしてくれる、そう思ったということにした。わけの分からないものに、関わりたくなかったし、それに正直、怖かった。動けなかった感覚が、まだ残っていた。

でも彼はそんな私にお構いなしで、いつも私に話しかけて来た。どうやら彼の声は、不幸にも私にしか聞こえていなかった。彼はそのことを知るとさらに調子に乗ったのか、放課後、お昼休み、果てには授業中にまで話しかけてくる。正直うざったいと思っていた。集中させろ。授業中ぐらい。他の時は無視すればいいだけだが、授業中は特に耳障りだった。

放課後一人になるといつも、彼は黒板から私の前に姿を現した。しかし私は彼を見ないようにして無言で横を通りぬけていく。彼は追ってはこなかった。悲しそうな目をしてしたが、もうその存在に気付かなかったことにした。

さすがに何度も、それが黒板から出て来るのを見ると、彼が黒板であることを信じざるを得なくなった。信じたくはなかったのに。

しばらくして、彼は黒板本体から離れられないことを知った。逃げる私を追いかけてこないからだ。もしそんなに話したいなら、私を追いかけてくればいい。実際追いかけてられて、家までとか来られたら困るけど。そのことに気付いた時は、彼は本当に黒板なんだ、ぐらいにしか思わなかった。じゃあ、黒板の化身のようなものだろうか。どちらにしろ、なんせ現実には彼を見ている。現実離れたことだけど、もう否定のしようがなかった。

友達にこのことを話すと、「ついに電波を受信し始めたか」とか「将来作家にでもなるのか」みたいな反応をされた。私は真実を言っているだけだ。ただ突拍子もないだけの真実を。誰も信じてくれなかった。私と同じ思いをすれば、きっとみんな信じてくれるのに。誰も知らない世界を知っている、みたいな優越感は微塵もなく、嘘だ、と笑い飛ばすみんなが羨ましかった。

こうして「黒板」は誰にも相手にされないまま、二週間が過ぎた。それなのに、彼はまだしょうご性懲りもなく話しかけてくる。ある時、私は意を決した。

放課後、一人になるまで待って、私は黒板に向かって話しかけた。

「どうして私に話しかけてくるの？」

最大限の怒気を含んだつもりだったのだが、それを聞いた彼は盛大に喜んだ。

「やっと答えてくれた」

そう嬉々とした声が聞こえると、「黒板」がまた黒板から出てきた。

「よかった。もしかして聞こえてないんじゃないかと思った」

いつもと変わらず、やはり彼は半透明。確実に人間ではないけれど、今はもう、初めて会った時ほど怖いとは感じなかった。とはいえやはり得体が知れないので、本能的に少し後ずさりしてしまったけれど。でも、今日の私はもう覚悟を決めている。一歩進んで、彼に言った。

「話しかけるのやめて下さい」

「嫌だ」

即座に断られた。でも私は諦めない。これは平和な学校生活を取り戻すための戦いなんだ。

「迷惑なんです。授業中に話しかけられても。そもそもなんで話せるのかもアレだけど」

そう言うと彼は少し考え込んだ。下を向いてうーんと唸っている。もしかして、私の迷惑を察してくれたのだろうか。

「なんで話せるんだろうね」

「そっちじゃない」

「いや、でも気にならない？」

「……気になる……ってそうじゃない、話を逸らすな」

おちよくられているように感じて、少し声がきつくなる。私が「黒板」を睨むと、彼は後ろを向き、自分の本体の周りを歩き回り、うん、と頷き私に顔を向ける。

「確かに。邪魔だよ。授業中は自重するよ。僕が悪かった」

思ったよりあっさり勝利した。拍子抜け。どれだけ無視されても諦めなかった彼のことだ、小一時間は粘られるかと思ったのだけれど。

「けど」

けど？

「せめて放課後くらいは、僕の話相手になってほしい」

私は即座に反応してしまった。

「どうして？ どうしてそこまで私に頼むの」

答えずに無視して帰ってもよかったのだろう。ただ、それ以上に気になってしまったのだ。彼がそこまでして私との会話を望む理由。もしかして、新手の変態か。私が身構えると、彼は壁にもたれかかり、神妙に話し始めた。

「黒板の寿命って何年か知ってるかい」

「知らない。三十年くらい？」

「それくらい生きたいね。材質にもよるけど、僕の種類はその半分らしい」

へえ。それがどうかしたのか。

「ちなみに僕は十五歳」

「じゃあそろそろ寿命ね」

「あと一、二年は頑張れると思うけど。だから手を合わせないで、まだ生きたい。いま死んじゃたまらない」

恨みたっぷり都合掌していた手を後ろに隠す。さすがに不謹慎だっただろうか。彼は続ける。

「僕は十五年間ここから多くの人間を見てきた。面白い人間、優しい人間。真面目な人間に、暴れん坊な人間も。いろいろな人間がいたよ。僕はある時から、そんな彼らに話しかけ始めたんだ。人間と話がしたいと思った。でも、誰にも、僕の声は届かなかった」

「それってどのくらい前？」

「この教室が三年生用になった時だったから、五年と少しくらいかな」

約五年間ずっと呼びかけ続けたのか。その諦めの悪さには尊敬しないではいられない。何か一途でキュンとするものを感じる。

「実は本体から出れたのって最近で、君たちが三年生になったくらいの頃なんだ。そ

の時はびっくりしたけど、同時に、今度こそ声が届くかもって期待した。実体化なんて、奇跡じゃないか」

「でも、声は届かなかった」

私が口をはさむと、彼は無言で頷いた。そして、彼の話は今に至る。

「そして、このまえ君に声が届いた。びっくりしたよ。それまで届いていなかったものが突然届いたんだから。僕と話せる人間は君が初めてで、僕は君としか話せないんだ」

まあ、普通はその初めても起こり得ないわけだけど。

話の中には、疑問もあった。なぜ、初めて話せたのが私なのか。でも、きっと彼にも分からないのだろう。

「僕はこの教室で、絶対に交わることもできない、たくさんの人間を見て生きて来た。彼らを見て、僕は人間に憧れたんだ。自由な人間に。そして僕は人間のことをもっと知りたい、もっと話をしたいと思った。それに……」

彼が突然うつむいて、言葉を濁した。そして、小さく、早口で。

「もう、一人ぼっちは嫌なんだ。話せる人と出会えたのに、またあんな日々に戻りたくなんてない」

自分の欲しいものが、いま目の前にある。あと数歩、足を動かせば取れるほど近くに。でも、動かせる足を彼は持ち合わせていなくて、どうあがいても得ることはできなかった。実体化できて、やっとのことで動けても、状況は変わらなかった。それに、道具である「黒板」に、注目してくれる人間なんて、この教室にはいない。そんな歯がゆい孤独を、八年も続けてきたの？

そんなの耐えられないよ。心がどうにかなってしまう。私はあくまで人間だから、うまく想像なんてできない。私にすると、知ってる人みんなと話せなくなるとか、長い間一人で部屋に閉じ込められるとか、にあたるんだろうか？ いや、きっと、もっと辛かったはずだ。だって、彼は最近まで、視界すらも動かせなかったのだから。おまけに、彼はいつ、寿命が来るのか分からないのだ。

「……いいよ。話すくらいなら」

来た時には、絶対しないと決めていた返事だったのに、思わず口に出ていた。ただ、彼の境遇を考えると、突っぱねることなんてできなかった。彼はさすがにいいほどに可愛い笑顔だった。直感であって、根拠なんてないけれど、少なくとも彼は悪いやつではなさそうだ。だったら、少しくらい、優しくしてあげても、いいんじゃないかな。

それに、一人ぼっちがどういう気持ちか、私だって少しは知っているつもりだから。

こうして、今の関係が出来上がったのだ。人間と道具の、本来なら絶対に成り立たない奇妙な関係が。

「あなたは黒板の中にいる間、何をしてるの？」

とある日、十一月月上旬の少し暖かい夜。学校では文化祭のシーズンである。準備のためにみんなが遅くまで残るので、一人になれるのを待っていたら日が落ちてしまった。私は黒板から出てきた彼に、出会い頭に質問をぶつけた。彼は学ランを着崩して、髪の毛がツンツンに立ったやんちゃスタイルだった。彼は黒板から出て来る時、姿をある程度変えられることを発見したらしい。昔見た生徒や先生の姿を真似て、一番似合う格好を探しているようだ。だが今日のこれは、正直、似合わない。今日はファッションについて教えてあげよう。私は女子だが、きっと彼よりセンスのあるコーディネートができるだろうから。

一度割り切ってみると、私と彼は案外すぐに仲良くなって、今では毎日話をするようになった。あれだけ彼を敬遠していた私はどこに行ってしまったのか。

私たちの会話は大抵の場合、質問から始まる。私はモノについての、彼は人間についての疑問をぶつけあって、互いにそれに答える。そして、これが面白い。彼から聞くどんな話も、私にとっては新発見ばかりだった。視点の違いを思い知らされた。こ

の思い、みんなもぜひ体感してほしいなって、私は本気で思う。無理だけど。

でもその前に、私はそのことを聞いたかった。中で何をしているのか。彼はいつでも黒板の中から出て来ることができる。授業中は私の集中のために自重させたが、この話好きでさみしがりやの「黒板」は、中では一人で何をやっているのだろうか？ 十五年を一人で過ごしてきた彼だ。何かすごい、さみしさを紛らわすコツを知っているに違いない。そう期待をこめて、聞いてみた。

「中から君たちを眺めてる。終わり」

「それだけ？」

「それだけ」

「画期的な暇つぶしとか」

「ない。逆に教えてほしいね」

「夢のない生活だね」

「人様の生活になんてことを言うんだお前」

君は人じゃない……じゃあなんて言えばいいんだ？ モノ様？ 分からん。日本語って難しい。

でも確かに、中で夢のあることが起こっていれば、人間に話し相手なんて求めないか。

「じゃあさ、君の中ってどうなってるの？」

「分かるわけじゃないじゃん」

質問を変えると、彼はそう答えた。私が「え？」と、わけ分かんない、みたいな声をあげると、彼は呆れるように答えた。

「考えてみなよ、君。君は自分の体内で何が起きているか、自分で分かるのかい？」

「……なるほど」

言われてみれば、分かるのは体の調子くらいだな。「あ、いま朝ごはんの卵焼きが胃液で溶かされてるー」とか分かりたくもない。想像してしまう。透明な液に浸かった卵焼きが溶けて、煙を上げながらどろどろと形を失っていく。あれ、胃液って何色なんだろう。

……とにかく、これはちょっと嫌だ。

「……じゃあ中って暇じゃないの？」

消化の想像から逃げ出したくて、話をなんとか戻そうと私が聞く。すると、彼から予想外の言葉が返ってきた。

「ところが暇じゃない、むしろ忙しいくらいだ」

「え？ なんで？ やることないのに」

思わず口から本音がこぼれ落ちる。

「僕には仕事があるからね」

彼はそっけなく返す。私は興味津々で、彼の前まで自分の椅子を持って行き、彼の目の前に座り直す。

「仕事って？」

「よくぞ聞いてくれました」

彼はそう言って咳払いを一つ。先生気分か。

「君たちは僕に字を書くだらう？ 僕はその意志を受け入れないといけないんだ……分かる？」

「よく分からない」

「やっぱり？」

「今の説明で分かっただらうすごいと思う」

断じて、私がバカだから分からない、というわけではないと信じたい。彼は考え込み始めた。きっと私でも分かるような説明を考えているのだろう。そして彼が口を開いた。

「モノにはみんな意志がある……って信じてくれるよね」

「うん」

今更信じないなんて、それを言ったら嘘になる。そもそも、目の前の彼が、その意

志を持った道具だし。

「例えば今、君が座っている椅子。椅子は君を支えようとする。それが彼の仕事さ」  
確かに。そういう考えもできる……のかな。

「じゃあさ、もし椅子が『あー、もう面倒くさい』とか言って仕事をさぼったらどうなるの？」

「どうなると思う？」

逆に聞かれて、私は考える。しかし、思いつかない。椅子がどこかに逃げ出すわけでもないだろうし。

「どうなるの？」

「君は椅子から落ちる」

「えっ！」

無意識に立ち上がってしまう。我に返って彼を見ると、笑いをこらえるのに必死なようだ。

「椅子はそうそうさぼらないよ。普通に座っている人間が落ちるってということは、椅子のどこかが壊れて、上にいる人間が落ちるってことだしね」

「ポルターガイストみたいなものじゃなくて？」

「君にしては難しい言葉を知ってるね」

「私だって、難しい言葉の一つや二つくらい知ってるよ。あまりバカにしないで」

最近読んだ漫画で知ってたのであって、勉強した結果じゃないけどさ。

「……で、どうなの？」

「まあ違うね。僕たちは魔法使いじゃない。ただ、しゃべれるだけさ」

彼らの言う魔法とは実にハードルが高い。しゃべれるだけで魔法みたいなものだろうに。

「話を戻そう。かく言う僕も、チョークの石灰を自分の体につけて、離さないようにしよう、って思わないと、チョークの粉は勝手に落ちてしまうんだ。これじゃ単なる塗り壁にしかならない。さっきの椅子だけじゃなく、僕たち道具は、仕事をさぼると、やれ不良品だと言われ捨てられてしまうからね。僕はまだ死にたくないし、道具はみんなそうさ。死は人間にも道具にも平等だね」

これからはもっと彼らをいたわってあげよう。みんな死は怖いんだ。モノを壊す人間は、彼らにとっては殺人鬼みたいなものだろう。大事にしなきゃ、と心に誓う。彼らには罪はない。

「……大変なんだね、道具のみんなも」

「全くだ。君たちは仕事してないのに」

「ちょっと待て。私たちは勉学という学生の本分をだな」

彼の発言に少しかちんときた。確かにその本分での結果は出ていないが、頭が悪いなりに頑張っている。そのつもりなのに、そんな言い方されるのは少し心が痛むし、ムカっときた。だから反論してやるつもり、だったのだが。

「二時間目の国語」

「？」

「君寝てたろう」

いきなり彼に痛いところを突かれてしまう。

「……いや……少しぐらいは、ねえ」

「何を言うか、爆睡だったじゃないか。見ていてさすがにいいくらい良い寝顔だったよ。僕は不眠不休なんだがなあ」

「なら起こしてよ！ 恥ずかしいじゃん！」

もちろん、私に反論の余地はない。授業を寝過ごしたのも、恥ずかしい寝顔を見られたのも、全て昨日、夜更かした私が悪いので、八つ当たりはお門違い。乙女の寝顔を観察するとは、趣味が悪いと断じざるを得ないが。

「それに四時間目の数学」

「いや、寝てないよ！ 先生に当てられて答え書いたじゃん」

神に誓って本当です。私は真面目に授業を受けていた。結局間違えたけど。

「あれの間違い方といたらまあ」

彼は満面にニヒルな笑みを浮かべてこう言った。ああ、出会った頃はもっと純真だったのに。もっとお話ししたいってやってくる姿は、イヌみたいに可愛かった。

しかし今はどうだ。もはやただの皮肉屋だ。態度もだんだん尊大になった。どうしてこうなってしまったのだろう。どうやら私は、かなり見下されている。彼のにやけづら面を見た私の中で、何かが燃え上がった。これは少しお灸を据えなくては。人間の力を思い知らせてやる。

「だったら君は解けるの？」

そう挑発すると、望むところだと、彼は自信満々に言った。私が持ち合わせていた問題集の中から問いを出す。彼は、僕が言うことを写して、と私に伝えて、本体に戻っていく。そうか、彼が中にいないとチョークが乗らないのか。これが彼の仕事か。彼の話が、少し理解できたような気がする。

この時私は、少し意地悪をした。この問題は、入試問題の中でも、かなり難しいレベルの発展問題なのだ。無論、私には解けないが、彼に容赦はしない。せいぜい迷走して、そして私の持つ巻末解答に助けを請えばいいんだ。

彼は少ししてから、数式と言葉を滑らかに述べ出した。私はそれを丁寧に彼に書いていく。

書くほどに、私の顔は青ざめていった。彼の導いた答えは、お世辞抜きで、完璧だったのだ。なんせおバカな私が、書きながら納得できるくらいなのだ。なんでこんな問題ができるの？ そう聞くと、彼は自信満々に胸を張りながら、こう語る。

「僕は人間が自分に書いたことを覚えているのさ。この教室ではね、一年生を三年間、二年生を六年間、三年生を、君たちを含めて六年間受け入れた。僕は三学年分の授業を見て、それだけの量の板書をされた。中学生が習うことはほとんど知ってるよ」

人間代表は返り討ちにあって、逆にお灸を据えられました。さらに、モノ代表は人間に追い討ちをかけるようにこう言った。

「しっかりしてくれよ。僕たちを作るのは君たちだ。未来を欠陥品まみれにしないでくれよ。僕ら道具は、人間がいないと生まれてすらこれない。その点で、僕らにとっては人間は神様みたいなものなんだから。君を見てると、人間様へのありがたみが薄れるけど」

脳裏に浮かぶ、材料の大きさや分量を間違えておろおろする私と、その前で形にすらならない黒板……とも言えない塊。これでは彼らにとっての神様たる人間なんて名乗れないよ。私は大きく首を横に振って、その想像を振り払う。

すると、違う記憶が勝手に顔を出してくる。「偏差値四一」。「判定E」。やめろ、出て来るな。見たくもないんだ君たちのことなんて。

だけど、時期が時期なのだから正直これはまずい。どうにかしなくては、と思っても、正直独力の勉強に限界を感じてもいた。私は要領も悪いことが、最近になって分かった。自分の世界にだんだん沈んでいき、そのことばかりを考える。私は、どうしたらいいのだろうか？

「……おーい、どうした。僕そんなきついこと言った？」

心配になったのか、彼が声をかけてきた。その時、私の中で何かがはじけた。

「……そうだ、その手があったか……」

月曜日の朝一番、誰もいないホームルーム。机と椅子だけが整然と並ぶ静かな教室が、私は好きだ。落ち着くんだよね。もちろん友達（人間の）と騒ぐのも嫌いじゃないけど。人間じゃない方には、たまに勉強を教えてもらう関係になった。私に勉強を教えて下さい、と頭を下げた時には、

「え？ 道具が人間に教えるの。何それ超皮肉、笑える」

とかバカにしていたが、しばらくすると気が変わったのか、

「道具が作り手の上に立つ貴重な機会だ、せいぜい可愛がってやる」

と彼の方がむしろノリノリになって、毎日私に厳しく勉強を教えてくれる。いわゆる愛のムチというものだろう。愛の所在が分からなくなる時がたまにあるが、きっと

気のせいだと信じたい。

私としては、彼が楽しそうでなによりだ。だが、彼はさらに口が悪くなった。なのでむかつくことも多かったが、彼の授業は学校の先生より分かりやすいうえ、目に見えて成果が出てしまったので何の口答えもできない。いや、嬉しいことなのだが、出来すぎだろう、と自分自身に引いた。なんせ始めてから二週間後に中間テスト（二学期制のため十一月下旬にテストがあるのだ）があったのだが、五教科合計五百点満点のところ、前期の期末テストから、なんと百点以上も上がっていた。順位にして実に八十人抜き。学年の半分近くをこぼす抜きする快挙である。担任からは、「お前どうした、いい家庭教師でもつけたのか」と驚かれた。「黒板」さまさま様々。

そんな彼は毎日違う顔で出てきた。顔や体を作るコツを掴んだのか、彼はどんどんイケメンになっていった。口が悪い男は、私のタイプではないけれど。もしも彼が人間で、転校生とか言って教室に入ってきたなら、間違いなくクラスで大人気になるだろう。そうなったら彼はきっと、たくさんの人と話せて幸せだろう。嬉しさのあまり、卒倒してしまうかもしれない。そうなったらその日の授業が困るけど。

あれ、でも、もしそうなったら、彼は私に構ってくれなくなるかも。そうしたら、私は彼に何も教えてもらえなくなるかも……やっぱり、彼が私にしか見えない存在でよかった。でも私は、自分のことしか考えてない。彼の幸せは二の次。それはもしかして、人間のエゴ？ 考えてみても、私の頭じゃよく分からない。まあいいや、そうなった時に考えよう、とシャーペンとノートを出そうとすると。

「金曜日の夜は来なかったね……」

「ひゃわっ！」

驚きの声をあげて思わず振り向くと、目の前で彼が浮いていた。今日も爽やかイケメン、そしてその顔に似合わないニヒルな笑みを浮かべて。

「そんなに驚くこと？ しかしこれが幽霊というものの本来の悦びか。意外に気持ち良いもんだなあ。大げさな驚きをありがとう」

彼はそっけなく言い放つ。くそ、恥ずかしい。あまりに突然だったから、変な声が出てしまった。自分の全身が熱くなっていく感覚が、指の先まで伝わってくる。悔しい。仕返ししたい。大体お前幽霊じゃないだろ。自分で否定したじゃないか。

いや、今はそんな細かいことはどうでもいい、奴にも恥ずかしい思いをさせてやる。黒板を・赤・板にしてやるんだ。私は、反撃を試みた。

「そういうあなたこそ、開口一番『金曜日の夜は来なかったね……』なんて、もしかしてさみしかったの？ おう、おう」

そう言って私は彼にしつこく突っかかる。自分で言ってる、この台詞はオヤジ臭いな、と思ったけれど、今は彼への逆襲が先だ。彼の言葉をダシにして攻め続けると、彼はだんだんシュンと小さくなっていく。反撃成功。久しぶりに勝った。そしてついには、彼は本体の中に帰って行ってしまった。そして黒板の中から独り言が聞こえてくる。

「いいじゃないか君は。家に帰れば家族がいるし、友達に会いに行くこともできるさ。でも僕には……」

本体の中で、彼がどんどん小さく、ブルーになっていくようなイメージが伝わって来る。あれ、気のせいかな、彼の本体が青色に見えてきた。よく考えると、彼は十五年の孤独の辛さを経験し、一人ぼっちを怖がっていたんだ。そこをえぐるとは、これは悪いことをした。

「ごめんね、悪気はなかったの」

「分かってるよ。最近、君と話すのが当たり前になってたから」

彼の答えに、私は少し安堵した。同時に、少しドキッとした。女心をくすぐるじゃないか。確かに最近は休みも学校に忍び込んでいたからなあ。後輩が部活をやってる分、入り込むのも、居座るのも随分楽で助かる。

彼は中から出てきてくれそうにない。相当しょげているみたいだ。だから、私は黒板本体に向かって話す形になる。

「ここ三日間家の用事でさ、学校に来れなかったの。でも大丈夫。単語帳でどこでも勉強できる」

「意外に熱心だね」

彼はちょっと小馬鹿にしたような口ぶりだった。このやろう。しょげてるんじゃないのか。少し荒ぶりそうになる感情を私は抑える。

「今日も勉強しに来たんだよ。朝って案外集中できるし」

「そう、だったら早く取り掛かりなよ。もう一〇分も過ぎてる」

彼は恨んでいるのだろうか？ 言われなくても、と私は数学の問題集を取り出す。今日は、もう彼は出て来そうにないな。私はシャーペンを取り出し、問題に向かう。今日は二次関数の文章題だ。これが苦手でもとほと困っている。

しかし、始めてすぐに私は落とし穴に気付いた。目の前には「黒板」。彼は私を見ているかもしれない。簡単な問いに悩む私の姿を見て、笑いをこらえているかもしれない。表情が見えないので、なおさら体中がそわそわする感じになる。

案の定、私はなかなか集中することができなかった。集中できないまま解ける問題じゃなかった。それでなくても数学は苦手なのだ。先月の模試で二八点という大失態を犯したくらいに、である。エックスとワイが頭の中で踊り始めた。しばらく一人で戦ったが、すぐに力尽きた。

「『黒板』さん、助けて下さい。お願いします」

結局、教えてもらった。何回も頼むと、彼は仕方なく、といった表情で出て来てくれた。

私には難しい問題も、彼にとっては朝飯前だ。彼は一目見てすぐ、解法を私に説いた。いつも通り、とても分かりやすかった。少し頼りすぎかな、と思っていると、彼はタイムリーに愚痴をこぼす。

「これくらい自分で解いてくれ。基本問題だよこれ」

私には無理、と机に倒れこむ。朝の冷気に当てられてひんやりした木の表面が、意外に気持ち良かった。オーバーヒートしている頭に、一服の清涼剤。その時、私は気付いた。

「『黒板』！」

「何、声が大きいよ」

「ここの机や椅子とは話せないの？ そうすればあっという間に友達七〇人。一〇〇人も夢じゃないよ」

我ながら画期的な案。これなら、彼を救える。もう夜も一人じゃなくなる。そう思ったが、彼はさみしさを感じさせるようなトーンで呟いた。

「もう何度も話しかけてるよ。でも誰も反応してくれないんだ。この教室には、僕だけしかないようなものさ」

私と彼しかない教室。後ろを振り返ると、物言わぬ机たちが並んでいる。あれ、この部屋ってこんなに広がったっけ？

私が感じたその感覚は、多分彼の感じていた孤独のほんの一部だろう。私はきつと、その全てを感じることはできないから。

彼はいつも、誰もいない教室の中で過ごし、淡々と黒板としての仕事をするだけ。彼はここから動けない。実体化ができて、本体から離れられない。周りの道具も、自分と関わりを持ってくれない。彼の世界は、およそ教壇二つ分の広さだけ。

人間は、こんな不自由耐えられる？ 逆に、どうして彼は耐えられる？

彼の境遇は、ずっと前から分かっていたことで、今更という驚きこそない。けれど、考えるとやっぱり何か心が痛くなる。

私は、人間に生まれてよかったと思っている。だけど、彼はどうなんだろう？ 黒板として生を受けて、本当に幸せかな？

それを聞くことは、はばか憚られて出来なかった。私はあくまで人間だから。彼に聞くのは失礼かも。

その日はずっと、集中できなかった。

それから私は、彼にそのことを考えさせないようにしてあげよう、と思って、彼とより多くの言葉を交わした。せめて、私がいる間くらいは。いつも通りに接して、いつも通りに勉強を教えてもらい、その代わりに、いつも通りに人間のことを教えてあげる。

そうして、時間が過ぎていき、教室の壁にかかった日めくりカレンダーが数十枚めくられた。

十二月も中旬、冬休みを直前に控えたある日。外では雨が降っていた。クラスメートたちが下校した後しばらくすると、彼が黒板から出て来た。そして、彼の姿を見て思わず目を見開く。今日の彼は、真面目そうな黒縁メガネとスーツのコーディネイト。え？ という表情を浮かべる私。普段生徒みたいな格好だったじゃん。頭の中ではクエスチョンマークが増殖し始めた。なんで今日は教師の格好してるの？ これまではずっと生徒の格好だったのに。

そんな彼の変貌にただ困惑している間に、彼は私の前に近づいてきた。それもかなり厳しい表情で。何？ 今日はどうした？ 怒っているのか？ 別にもの投げつけられたりとかはしてなかったはずだけど。彼の表情が読めない。

「模試の結果を見せなさい」

彼に言われて、ああ、と思い出す。そういや今日返されたわ。個人的には彼のキャラの方が気になるのだが。いつの時代の新任教師？ どんな心境の変化だろう。そっちが気になって仕方がないが、空気を読んで素直に従うことにしよう。本当は、出したくない。その理由は、返却された成績表に書かれている言葉にある。

「えーと、『偏差値五四、判定D、あと十ポイント必要です』と」

「へへへ……」

要するに、偏差値がまだ足りないのである。確かに二ヶ月で随分とましになった。偏差値が県平均を超えるなんて、何度夢見たことか。だが、まだ足りない。さすがに二ヶ月で判定A、Bは夢のまた夢。

分かってる。ここは漫画の世界じゃない。都合が良すぎるこつてよっぽど起こらないんだ。目の前に全能の教師が現れただけで、漫画みたいな奇跡で、これ以上都合良くはいかないよね。私が打ちひしがれていると、彼は投げやりにとんでもない台詞を吐いた。

「まあそんなもんだよなあ普通」

「……！」

ちょっと待て。じゃあ今までの私たちの努力はなんなんだ。発言の真意を聞き返す。

「僕が君に教え始める前のさ、君が取った点数って覚えてる？」

どうだったか。本当は思い出したくないんだけど、あんな黒歴史。

「さすがに点数は忘れたけど、数学と理科がとんでもなく悪かったことは覚えてる」

「そう。君は特に理系教科の出来がひどいものだったんだ。だから、今まではその二つに重点を置いて教えてきた」

「ああ、確かによくやったね。おかげで数学も理科も平均点取れたよ」

「ああ確かになって、君は自分の弱点について、自覚がなかったのかい？」

「……いや、あったんだけど、勉強しても分からなくて、逃げてました」

結局、受験生としての自覚が足りないのは私みたい。大体、平均点で満足してはいけないのだし。

「さておき、そして君は理系教科でも平均点は取れるようになった。ただね、君は今までできなさすぎたくらいなんだから。ちゃんと学んで、公式を覚えれば、すぐにそれくらいまでは上がるんだ」

……までは、か。

「三十点から十点上げるのと、六十点から十点上げるのと、どっちが難しいか、って話だよ。簡単だろ？」

六十点から上積みする方が、難しいに決まっている。

「つまりここからは、今までみたいにとんとん拍子には上がらない、ってこと？」

「そういうこと。君はもうほとんど伸びしろを使い果たしてしまったんだよ」

「なんとかならないの……」

「こればかりはね。僕はあくまでしゃべれるだけの黒板であって、魔法使いじゃな

い。正直、今の僕には、君を導ける自信がない。時間がなさすぎるよ」

その言葉を聞いた時、私の心が青く染まる。冷たい青。彼が言わなくても、私自身が、厳しいってことくらいよく分かっている。私立入試は二月の上旬だから、あと一ヶ月半しかないのだ。諦めるべきなのだろう。志望校のレベルを落とすべきなのだろう。高校なんて、きっとどこでも住めば都。きっと大して変わらない。

普通だったら、そう思うだろうけれど。

「でも、諦めたくないんだ」

さじ匙を投げそうな彼に、私は言った。白旗は揚げたくなかった。彼は何か疑問があるのか、首をかしげながら私の方を向く。

「君みたいに諦めが悪い人間は久しぶりに見た」

「それはありがとう」

今の私にとっては最高の褒め言葉。諦めが悪くても構わない。

「僕は君をだいぶバカにしてきたけれど、君の努力は知っている。だから、僕に教えてほしい。君は、どうしてそんなに頑張れるんだい？」

いきなり質問されて、頭の中がまた混乱を始めた。予想していない問い。私はそれに対して、うまく答えられない。それでも、言いたいことはもう決まっていた。

「私の場合はね、会いたい人がいるんだ」

「遠距離恋愛というものか。そんなピュアなシチュエーションは、最近はずた廃れたと思ってた」

「残念ながら女の子」

「ふーん、ガールズ・ラブってやつか」

「どこでそんな言葉を覚えたお前」

クラスメートは彼になんという落書きをしているのか。彼にこれ以上知らない知識を与えるな。問い詰めたいが今はその時じゃない。

「もっと普通の関係だよ。小学校の時に一人の友達がいたの。あかり朱莉っていうんだけどね。私の一番大事な友達だった」

その頃の私は、どこにでもいるような、普通の女の子だった。信じられないかもしれないけど、この頃の私は今よりずっと引っ込み思案。また他の子たちの中でも、頭が良かった方だった。それがどうして、こんなにおバカになってしまったのか。時間の流れとは実に残酷だ。

小六の夏休み明け、私は今いる町に引っ越してきた。いわゆる転校生。卒業まであと半年しかなかったが、たくさん友達を作って、楽しく過ごしたい、と小学校入学の時みたいな期待を持っていた。しかし、転校してきた時期が時期。その頃には、お友達グループなんて固まってしまっていて、所詮半年でまた離れ離れになるかもしれない子と、わざわざ友達になろうとしてくれる人はいなかった。

転校してすぐの体育の時間、ペアを作って準備体操をすることになった。入ってすぐの私は、結局一人余ってしまった。どうしようっておろおろしていると、一人の女の子が近づいてきた。

「あの……一緒にやろう」

その時初めて声をかけてくれたのが朱莉だったんだ。余っていた二人で、ペアを組んだ。

朱莉はその頃の私よりも、さらに内気で人見知りな女の子。いつも何かの絵を描いていて、誰とも話してる感じもなくて。それにいつだって、声をあげてはしゃぐようなこともなかった。いつだって大人しくて、隅っこで小さくなりながら、みんなを見てるような女の子。ずっと一人でいるから、それまでは少し話しかけ辛かったのだけど、その後も何回かペアを組んだら、難しい子じゃないって分かった。大人しいだけで、普通の女の子だった。私たちはその度に少しずつ仲良くなった。朱莉の描く絵は、可愛いキャラクターから、渋そうな風景画まで様々で、どれもみんなうまかった。いつもコンクールで賞を取って来て、嬉しそうに私に自慢した。

他の子のテンションにはなかなかついていけなくて、二人だけで過ごすことが多か

った。けど、朱莉と話すのはとても面白かった。物知りで、私が知らないことをたくさん教えてくれたから。あの子の話聞くために毎日学校に行ったようなものだ。学芸会とか、卒業式とか、ほとんど覚えてないけど、あの子から聞いた話はたくさん覚えてる。朱莉と一緒に描いた絵も、宝物みたいに大切にしまっている。

家もそれほど遠くなかった私たちは、同じ中学校に上がった。中学校でも二人で過ごした。あの頃は、毎日が楽しかった。ずっとこのまま、二人でいたいと思ってた。

でも、朱莉は一年で、県内の中学校に転校してしまった。

そして、私はまた一人になってしまった。

朱莉とは、メールで毎日のように連絡を取り合った。あっちでもなかなか楽しくやっているみたいだった。向こうの中学校にあった芸術部で、油絵の魅力にとりつかれたらしい。ちなみにその頃の私は、授業についていけなくなり、教科書に恐怖すら覚えるほどの勉強嫌いになっていた。今でも思い出したくない時期である。

三年生の夏休みになって、朱莉から一通のメールが届いた。「高校どこ行くの?」というものだった。もうそんな時期かと思いつつも、「一緒の高校行きたいね。朱莉はどこ受けるの?」と返した。

すると、彼女はT高校の名を出してきた。朱莉はそこにある芸術科を志望しているらしい。私は絵なんて描けないので、普通科を目指すことにした。成績についても聞かれた。その時私は、朱莉を心配させたくなくて、

「大丈夫。クラスでも上位にいるから。偏差値は六〇くらいあるよ」

と大嘘をついた。あの時の私の減らず口を、今からでも塞ぎに行きたい。

実はこの時、私はT高校のことなんて、名前しか知らなかった。でも、そんなのはどうでもよかった。そこがどんなところでも。ただ、朱莉に会いたい。理由なんて、それだけでいい。だから絶対に二人でT高校に行く、と約束した。目標がなかった私にとっても、都合のいいことだった。朱莉が行くなら、私も絶対に行きたい、そう思った。頑張ろうと誓った。朱莉と会える貴重なチャンスなのだから。

そしてその数日後の夜、私は母親の口から驚愕の事実を知った。

「つまり、母親の口からT高の偏差値の高さを聞かされた、と」

「……うん」

「下調べが足りない。完全に君の過失だよ」

今更傷口をえぐらないでほしい。無知な私が悪いのだ。それくらい分かってる。

「でも分からないね。一人っていても、僕は、君がよく友達と話してるのを見る」

「まあね。朱莉が転校した後、朱莉が向こうでも楽しんでるって聞いて、私も友達作らなきゃって走り回ったから。それで今の友達ができた」

「だったら別に、一人ぼっちとは違うよ」

彼は本当の意味での一人ぼっちを知っている。だから、私の言い分に納得できないのは分かる。でも、それは上っ面だけなんだ。周りに誰かがいれば、それでいいってわけじゃない。

「私はさ、今の友達も嫌いじゃないよ。でも、何かみんなに遠慮しちゃうところがあるさ。友達に合わせよう、合わせようって、無意識にしちゃうんだ。結局私も、こんなんで内気なんだよ。みんなに好かれるために、明るい自分を作ってるんだ。自分に嘘をつかないと、ついていけなかった。円満に生活するためには必要だって、分かってたんだけどね。だから、何となく気が休まらなくて。でも、朱莉に対してはそんなことなかったんだ。時々喧嘩だってしたけど、言いたいことを言い合える関係になれた。贅沢かもしれないけどさ、本当の友達って、そういうものだと思うし、そういうのに憧れる。だから、朱莉と他のみんなは、全然違うんだ」

そう言うと、彼は顎に手を当てて、何かを考え始めた。きっと、私の話を彼なりに理解しようとしてくれているのだろう。

「周りに人はたくさんいたけど、心は満足できなかった、ってこと?」

「そういうことかな、多分。朱莉みたいな友達が、こっちでも欲しかったんだ」

そして、それは目の前にいる彼なんだ、「黒板」。君には私の素の姿を見せられる。きっと君が、私の二人目の、本当の友達だ。本当に、感謝している。恥ずかしくて、口には出せないけどさ。

彼が感じたさみしさや苦しさとは、形も程度も違う。でも私もそんな奇妙な孤独感を、クラスメートに囲まれながら感じて来たんだ。一人ぼっちではないけど、一人でいるような気分になる。いくらみんなと過ごしても、満足できない。もちろん彼の孤独とは、比べ物にならないほど小さいだろう。彼の感じた孤独感は、私のそれのほんの一部、いや、それにすらならないかもしれない。

だけど、それを知っていたから、きっと私は、彼の話し相手という関係になったんだ。そして、それは教師と生徒の関係になった。私の憧れた友達に、私たちはなれたかな？

そんな彼はまた、私に聞いてきた。

「君が朱莉ちゃんとやらを好きなのは分かった。だから聞くのは野暮かもしれないけど、今までみたいに文通、とかでは満足できないのかい？」

それはね、みんなに言われたんだ。

先生にも、両親にも。クラスの子にも。そして、君にも。みんなにそう言われた。諦めろって。無理だって。

だけど、諦めきれなかった。どれだけ諦めようとしても。望みがほとんどない勝負であったとしても。

「けど、私は朱莉に会いたいからさ」

「それだけ？」

結局、それだけなんだ。

「理由なんてそんなもんだと私は思うんだ。私が単純でバカなだけかもしれないけど。でも、朱莉に会うのが、今の私の目標で、だからほんとは嫌いな勉強も頑張れるんだ。きっと人間なんてみんなそんなものだと思うよ。いつ決めたか分からないような、夢や目標に向かって、複雑な理由もなく歩いてるんだと思うんだ」

自分で言っている、私って単純って少し恥ずかしくなったりする。かっこいいこと言おうとして、空回ってしまったような気も。

彼は、目標ねえ、と呟いて考え込む。そして顔を上げた。

「そういうものなのかね」

「そういうものだよ、きっとさ」

彼が納得してくれそうだから、強引だけど押し通そう。

「何か羨ましいな」

彼が小さく呟いた言葉に、私は首をかしげる。別に羨ましがられることなんてしてない。彼が私の疑問を察したのか、その理由を話してくれた。

「僕たち道具には、目指すものも夢もない。ただ与えられた仕事をこなすだけの日常じゃないか。その点は羨ましいよ。人間っぽくて」

彼はまた自虐的に笑う。私は、彼の言い分に納得できなかった。絶対おかしいよ。今まで彼とたくさん話した。その中にはたくさんの自虐もあった。いいなあ人間、みたいな。それのほとんどは、私が納得できるものだった。でも、こればかりは絶対に違う。何かがおかしい。根拠なんてないけど、私には確信があった。それをうまく説明したりはできないけれど、私の思いを彼に伝えたい。その一心で、私は声を絞り出した。

「君も夢を叶えたよ」

「どういうこと？」

「君は、会いたかった、話をしたかった人間と繋がることのできたじゃない。そのために非科学的な奇跡まで起こした。誰よりも大きな目標を叶えてると思うよ」

もしもそれが、たとえ無意識のものであったとしても。偶然の産物であったとしても。多分これはこじつけだ。でも、それでも私は構わない。

彼は立ち上がって、無言で考え始めた。私も、彼と初めて会ったあの日を思い出す。その時の彼の笑顔が、脳裏から離れない。あの時の彼は、本当に嬉しそうだったのだ。

「私に声を通じた時、嬉しかったでしょ？」  
彼は思考を止めて、こちらを向いた。  
「それはもうね。生まれた時以来の喜びだった」  
彼の顔から自然と笑みがあふれている。私には想像できないほどの感情なのだろう。

「ならば、次の目標を立てよう。私も応援するから。私が卒業しても、たまには遊びに来るから。遠くに引っ越すわけじゃないんだからさ」  
もう一度、あの時みたいに笑ってほしい。この気持ちは本物だ。  
「大丈夫。もう次の目標は決まってる」  
「おお」  
「三つあるんだが」  
「多いね」  
でも、きっと欲張りはいいことだ。彼が前向きになってくれて嬉しい。  
「私に、聞かせてもらってもいいかな？」  
そう促すと、彼は高らかに宣言する。  
「まず、君の次に僕と話せる人を探すよ。そんなに残りの寿命はないだろうけど、もっとたくさんの人と話したい」  
「いいんじゃない？ そうなったら私にも紹介してね」  
もしそんな人がいるなら、私も会ってみたい。道具と話すという、ありえないことができる人に。そういう友達も、いたらいいなあ。皮肉を言う彼に、二人で反論するのだ。その姿を想像する。きっと楽しい日々だろう。  
「で、二つ目は？」  
そう言うと、彼は突然後ろを向き、二つ目を言い淀む。  
「これってさ、結構恥ずかしいな」  
「一つ目をあれだけ堂々とっておいて。誰かの前で宣言した方が、モチベーションが上がるんだよ。ほら、言った言った」  
そう言うと、彼は向き直って、大きく息を吸って。彼は言った。  
「君を朱莉ちゃんとやりに会わせること」  
え？ と私は茫然と彼を見る。  
「諦めるん……じゃなかったの？」  
「生徒が諦めてないのに、先生が投げてどうするのさ。それに、君への恩返しもある。君と会えなかったら、きっと一人ぼっちで寿命を迎えてた。僕は、君の役に立ちたいし、君の夢を最後まで見てみたくなった」  
彼はにやりと笑って言い放った。いつもの不敵な笑みだ。  
「あ……ありがと」  
思わず感謝が零れる。嬉しかった。私のことをこんなに気にかけてくれるなんて。  
彼は「私を導く自信がない」と言った。だけど今も、私の目標を応援してくれて、また導こうとしてくれている。彼が私を見捨てていないことが、無性に嬉しかった。だからつい、頬が緩む。気付くと彼が、私の顔を覗き込んで、またにやにやと笑っている。  
「照れ隠しかい？」  
「違うよ！ あ、じゃ何か作戦とかあるの？ 一週間で一気に偏差値が五上がるとか」  
私は期待を持って彼に詰め寄る。彼がにやける時は、何かしらの自信がある時だから。  
「ない」  
「なんだ……」  
やっぱり。都合よく、ヤマを当てられる方法が用意されていたり、なんてことはないんだ。また私の闘争心が消えそうになる。  
「じゃあどうするの」  
「……気合しかないんじゃないの」  
ついに精神論に頼ってきたか。でも実際にそこまで、私たちは追い詰められている

のだろう。今更感のある話ではあるけれど。

「やるだけやろう。そうじゃないと、君だって後悔するだろ」

希望はもう小さくて、彼の口ぶりもどこか望みがないように聞こえた。

それでも私は、嬉しかった。あなたのためにも、結果を出したい。そう思ったのだ。恩返して言ったけど、本当に返さないといけないのは、私。「黒板」がいなければ、私はここまで来れなかったのだから。

私は彼の前に立ち、ずいと顔を近づける。そして、私も彼に宣言した。

「私も、『黒板』と一緒に合格する。だから、もっと私にいろいろなこと教えて下さい」

「厳しくするよ」

「一番きついコースでお願い」

また、今日から始めよう。まだ受験は終わっていない。きっとチャンスがあるはずだ。

「で、そういえば三つ目は？」

「ああ、三つ目。そういえばそんな話だったね」

忘れるところだった。せっかくだから、全ての目標を共有しよう。二人と一緒に頑張るために。

「三つ目は……言わなくていいや。秘密」

「はあ？」と声が漏れる。ここまで来て秘密？

「教えてよー」

「秘密の一つや二つ、あってもいいだろう。黒板にプライバシーの権利を」

まあ確かにそうか。私にだって彼に言っていないことくらい、いくらでもあるのだし。

「そうだね。じゃあ三つ目はまた日を改めて」

「そうしてくれるとありがたいね。ところで」

ところで？ 何だ。私の目標は今更聞かないだろうし何だろう。

「プライバシーの権利を守るための法律は何か答えよ」

問題かよ！ ってあれ？ 何だっけ……。

「個人情報保護法だよ。これくらい即答できずに何が第一志望T高校なのさ」

迷ってしまった私に、彼が呆れて答えを言った。ああ、そういえばそんな名前の法律だった。言われてみれば基本事項だった。合点がいった、と彼を見ると、彼は私を睨んでいる

「これは今日から厳しくいかなきゃね」

「はい……」

冬休みに入ってから、私と彼は毎日のように会い、朝から晩まで彼の授業を受けた。担任の先生に頼んで、毎日教室を開けてもらった。先生は、なぜ教室なのか、と不思議がっていたが、それでも正月三が日まで教室を開けてくれた担任には本当に感謝している。開けてくれなかったら、彼抜きで勉強することになるところだったのだ。もし受かったら、彼と朱莉の次に、報告とお礼を言いに行こうと決めた。

冬休みが終わっても、私たちの活動は変わらなかった。授業中はさすがに無理だったが、朝一番に彼のもとに行き、夜遅くまで教室にいて、彼と過ごした。帰りが十時頃になって、昇降口が閉まって、こっそり一階の窓から出たこともあった。分からないところを潰して、また出てきたところを潰して。力はついてきている気がした。その「気がした」は私の抱える不安をごまかしているだけかもしれない。でももう、できることをやるしかないのだ。

そうして、最後の一日も過ぎていった。

「試験当日に、なんで君が学校にいるんだい」

誰もいない朝六時の教室。私はこっそり学校に来た。さすがに早いので昇降口も職

員玄関も開いていないが、私は昨日こっそり窓を一つ開けておいた。これに気付かないとは、いよいよ我が校の危機管理が不安になる。一刻も早くアルソックを要請するべきだろう。されたら一番困るのは私だが。

教室に入っても彼は出て来なかった。黒板をノックする。おもむろに出てきた彼は、明らかに寝ぼけまなこだった。それに顔の造形もひどいものだった。先日までのイケメンが欠片もない。安眠妨害、と言わんばかりにジト目で私を見つめて、私がここにいる理由を尋ねた。

「いやあ、ちょっと来なくなっちゃって。それより仕事はいいの？ 不眠不休だったんじゃない？」

彼はいかにも頬をふくらませている。さすがに機嫌がよろしくないようだ。その上いきなり私に皮肉を言われているのだから、反応としては当たり前だ。自分がやられたらって考えろ私のバカ。

「よく考えたら、朝のこの時間なんて、誰も僕に字を書かないからね。手を抜くことを覚えた。人間の負の遺産も役に立つものだね」

負の遺産とは人間き、いや、モノ聞きの悪い。これは人間の素晴らしい知恵だ。そう反論しようとして彼を見ると、あれ、今日の彼はいつもと少し違う。そう。なんか……。

「普段より薄くない？」

彼は自分の姿を見て、ああ、とこぼす。間違いない。普段より透明度が高い。最近あまりに人間臭くなってきて忘れかけていたが、彼は半透明だった。それが今はより透けている。彼は自分に本来備わっていない四肢を確認した後、私に向き直って説明する。

「朝起きたばっかりだし。なかなか力が入らなくてうまく実体化できないな。夜の方が元気が出る」

そういうものなのか。夜型生活は健康に悪いぞ。それでなくても君は、寿命が近いんだから。手抜きを覚えたなら、もっと早く寝なさい。

しかし今まで何度も朝会ってきたが、もっと存在感があった。まあ今日は起こしてすぐだからか、と一人で納得する私の目の前に、彼がふわりとやってきた。

「それより、君には緊張というものはないのかい」

彼がそう言うのを聞いた途端に、体全体が重くなるような気がした。体中が、忘れていた緊張を思い出して、体が固まっていく。

「言わないでよ……実は結構緊張してるんだから」

自覚のある程度にはガチガチなのだ。朝いつものようにお箸を握れなかった。今までの緊張とは違う、独特な感覚が私の中を走り回っている。彼に勇気づけてもらいたい。固まった私の全てを溶かしてほしい。そんな期待も持ったりしながら、私はここに来た。

「大丈夫……やることちゃんとやったはずだから……失敗しないはずだから……」

「発言に生氣を感じないよ。今にも消えそうに弱々しいじゃないか。それとも消えて、僕みたいに半透明になって浮いてみるかい。そしたら君は本物の幽霊だね」

ふふっ、と少し笑ってしまう。ジョークをありがとう。気持ちだけは受け取っておくよ。きつと彼にだって、不安があるのだ。投げようとしたくらいなのだから。でも私のために強がってくれている、そう思いたい。彼はそんな私を見て思案した後、私に向き直ってこう言った。

「はい、今から言う問題を解け」

「ちょっ、え？ いきなり？ 当日の朝に新しい問題解かせる普通？」

「君は普通じゃないから問題ない。いいから写して。背面黒板でいいや」

いきなりの命令口調にびっくりした私は、流れで仕方なく彼の言う問題を黒板に写す。写して、解く。彼に見られながら勉強するのももう慣れてしまった。背面黒板に軽やかに答えを書いていく。どうやら背面黒板は、こんな時間でも手を抜かずに仕事をしているようだ。あなたも休んでいいんだよ、と言ってあげたい。

問題は何の障害もなく進んでいく。あれ、この問題どこかで見たような。

「できたよ」

彼は私の横に来て、左端から答えを見ていく。私が彼の後ろに回ると、彼の体の向こうに自分の答案が透けて見える。ああ、やっぱり彼は人間じゃないんだ。こんなに違和感なく、私は彼と話せるのに。

でもなんだろう、問題に対してもだが、今日の彼にも少し違和感を覚えるのだ。何だろうか。彼がまた話しかける。

「うん、合ってる。良くできました、はなまる」

「私は幼稚園の子供か」

「だんだんツッコミが早くなってきたね」

別に吉本に入りたいわけではないんだけど。それより私は感じた違和感を問いたです。

「私この問題やったことある？」

それを聞くと、いつも通りのニヒルな笑みを浮かべながら彼が答える。

「君に一番最初に教えた問題だ。簡単だったろう」

ああ、言われてみればそうだ。「私に勉強を教えてください」と頼んだその日、彼から初めて教えてもらった問題だ。その時は問題のとっかかりすら分からず、果てには基本中の基本である簡単な方程式を間違えて嘲笑された。その時の怒りで彼を殴りつけたことを覚えている。渾身の一撃は彼の体をすり抜けて、勢い余った私は体ごと、後ろに並んだ机たちに突っ込んだ。そんな頃が懐かしい。そう私が思い出に浸っていると、彼が私の目の前で言った。

「君にはもう力があるんだ。君が思っている以上にね。教科書にある問題くらいならみんな、もう簡単に解けるくらいの。失敗するかも、なんて小さくなる必要なんてない。それとも、僕に教えてもらったのに不安なのかい？」

うわあ高慢。どこからくるんだその自信。そう思いはしたけれど、彼の言葉が凍りついた心を少しだけ溶かしてくれた気がした。いつも通りに尊大な彼を見て、緊張していた自分が馬鹿らしくなってきた。

「……ありがと」

私は小さな声で呟いた。大きな声では言えなかったけど。

「いや、僕にとっても楽しかったよ。君に教えることができてよかった」

「完全に教師ね」

「もし人間に生まれ変わったら、教職免許を取るんだ」

「じゃあ勉強し直しだね、もう一回。今度は一五年分の知識を三年で詰め込まなきゃ」

「……人間の苦しみが少し分かったかもしれない」

「やっと人間様の辛さを分かってくれたか」

そう言って、私たちは笑う。教室に二人分の声が響く。でも、私たち以外に彼の声は聞こえないから、私が一人で笑い転げているように見えるだろう。

でもたとえ誰かがいたとしても、笑ってしまっていたと思う。

「頑張るよ、私。行ってきます」

「頑張れ」

私の決意を、彼は受け止めてくれたに違いない。あとは、力を出すだけだ。彼と一緒に得た強さを。今の私にできるのは、それだけなのだから。

試験は、大きなトラブルもなく、淡々と進んでいった。テストは確かに難しかった。でも、どの問題にも、見覚えがあった。彼と解いた問題たちだ。急に、体が軽くなるように感じた。傍にいないはずの彼が、体を押してくれている気がした。私の前からいなくなった彼が、私をまた助けてくれた。その感覚がなによりも心強くて、嬉しくて。体が温かくなるようで。

試験は大体うまくいったんじゃないかな、という実感はある。大きなミスはしていないはず。あとは結果を待つだけ。力は出せた。きっと今日は、成功だ。

その中でも、残念なことが二つある。一つ目は、T高校の教室の前にいた黒板とは、さすがに話すことはできなかったこと。試験が終わった後、興味半分で「聞こえ

ますか？」と話しかけてみたのだが、全く反応はなかった。あんな奇跡を起こせるのは、やっぱり彼だけだった。他の教室には、彼みたいに話せる道具がないかなあ。

もう一つは、朱莉に会えなかったこと。朱莉も試験を受けに来ているに決まっている。メールこそするけど、「黒板」に出会って勉強を始めてからは、朱莉に会っていないから。再会を楽しみにして待っていたが、朱莉は来ない。待ちわびた私は、朱莉にメールを送った。

「T高のどこにいる？ 試験終わったー。会いたいなー」

少ししてから、私のケータイが鳴る。わくわくしながらメールを開く。

「芸術科の試験は明日だよ？ 大丈夫だよ、合格決まったら会おう？」

え？ 知らなかった……。ショックを隠せない。せっかく会えると思ったのに。私はいかに志望校を知らずに受けに来ていたのか。もし試験科目に面接があったら、いよいよ大変なことになっていたに違いない。

朱莉は随分余裕なのかな？ と少し安堵しながら、T高校を後にする。

私は家には帰らずに、教室に向かった。彼にお礼を言いたかった。もちろん試験が終わったからもう会わない、というわけでもないし、高校浪人はさすがにできないので、万が一の時は公立も受ける。けれど、一区切りしたから、報告も兼ねて一回会っておきたかったのだ。もう彼が私の担任になったみたい、と思いながら学校にこっそり入る。日は陰っていたが、まだ昇降口は開いていた。すぐに教室について、私は小さな声で「黒板」を呼んだ。

しかし彼は出てこない。

私はもう一度呼んだ。

やはり出てこない。

何回呼んでも、彼は出てこなかった。どうして？

私は記憶を引きずり出しながら、手がかりを探した。私が何かかん癪に障ることを言ったのか、それとも今日は元気がないのか、黒板って風邪とか引くんだろうか。いや、そんなはずは。彼との記憶の海に潜る。その中で、私はあることに気付いた。今朝、私が感じた違和感。私が言った言葉。

「いつもより薄くない？」

そうだ。確かに薄かったんだ。気のせいじゃなくて、彼がいつもよりも、本当に透明だったんだ。

私はそこからいろいろなことを想像する。しかし、出て来る想像はみんなネガティブなものばかり。その中に、彼がパッと光となって消えていく想像が浮かんだ。

まさか……消えた……？ 私は大きく首を振ってその発想を払い捨てる。きっと明日になったらまた皮肉を言いに来る。こんなのもできないのかって言ってくれる。そうに決まってる。

「私、頑張ったよ。多分、ちゃんとできた。あなたのおかげだよ。ありがとう。じゃあね、また明日」

私は誰もいない教室に、声を出さない彼に報告して、学校から出た。私の言葉を、聞いていてくれると信じて。

しかし翌日から、彼が黒板から出て来ることはなかった。

彼がいなくなった。でもまだ、勉強はやめなかった。不安だった。本当に自分が受かっているのか。全く分からなかった。時間がたつにつれて、不安になってきた。

私はずっと、あの教室で勉強を続けた。彼が出てこない教室。彼の声が聞こえない教室。久しぶりの孤独。ああ、彼はこんな世界で過ごしていたのか。そう思うとだんだん涙が零れてくる。ただ、さみしかった。それでも、一人で問題集のページを繰る。彼は何事もなかったかのように帰ってくる、私はそう信じていたから。

それでも彼は出て来ないし、不安や怖さがだんだん大きくなっていく。その度に、私は何度も朱莉に電話をした。朱莉は自分のことも何も言わずに私を元気づけようとしてくれた。大丈夫、頑張ったんでしょ、と。それでも、勉強やめちゃダメだよ、私も頑張るから、と引き締めてもくれた。ああ、彼にも、朱莉にも、私は何回助けられ

ているんだろう。

試験の後の、ある授業の時。教壇に立っていた先生がおもむろに呟いた言葉に、私は衝撃を受けた。最近、チョークの乗りが悪いんだよな、という言葉。彼のことを思い出して、また心配になる。もしかして、彼の言う「寿命」がもう来ているのだろうか？ いや、そんなことはない。多分悪いのは彼じゃない、チョークの方が悪いんだ。仕事をさぼっているんだ。そう思うことにして、不安を遠ざけようとして、また不安に襲われて、また泣いて。そしてまた電話をして。それを繰り返しながら、私はペンを動かし続けた。

公立受験を忘れてだらけている姿なんて、朱莉にも申し訳ないし、彼には絶対に見せられない。もしかして、出て来れないだけで、今でも黒板の中から見てるかもしれないから。彼がいなくなったとしても、彼のために最後まで頑張りたかった。もしここで手を抜いたら、二人への裏切りになりそうな気がして。そうして日は刻々と過ぎ去っていく。あっという間だった。でも、彼といた時の方が、一日はもっと早かった。

T高は、合格通知を郵送してくる高校だった。てっきりT高校で掲示があるものかと思っていたが、どうやら違うらしい。それすら知らない私っていかがなものか、と思う。どれだけT高校自体に関心がないのか。とはいえ、その方が、私にとっては嬉しかった。

私は、彼と一緒に合格通知を見ようと決めていたからだ。掲示だったら、彼と一緒に見に行くことができないから。そのために、両親にも、担任にも、私に結果を伝えなくてほしい、と頼んだ。彼らは快く了承してくれた。きっと、自分で見たいんだ、と思ってくれたのだろう。でもそれだけじゃない。私の結果は、彼との結果だ。だから、彼に真っ先に見てほしかった。

しかしもう彼はいない。私が彼にどんなことを話しても、彼の前でどんな間違いをしても、彼は出てきてくれなければ、声も発してくれなかった。

誰にも見つかるはずもない時がよかった。二人っきりで、通知を開けたかった。だから私は夜になるまで待って、学校に忍び込んだ。フェンスを乗り越えて、校舎の裏に回る。今日の帰りに開けておいた窓は、まだ鍵が開いていた。私はそこから校内に入って、一直線に教室に向かう。いないんだろうな、と思いながら、それでもほんのいちる一縷の期待を持って、私はドアを開けた。

やはり、彼はいない。

暗くて無人の教室は、いつも以上に広く感じた。黒板の目の前に、机と椅子を持ってくる。私はそこに座って、通知を机の上に置く。彼はいなくても、彼の目の前でこの封筒を開けようと思った。

ポケットからハサミを取り出す。封筒の頭をゆっくりと切っていく。中には紙が一枚入っていた。

一枚の紙を取り出す。白紙。えいと裏を向けると、切込みが見つかった。袋とじ。少し気が抜けてしまう。気を取り直して、私は「いくよ」と呟いた。どこかにいる彼に聞こえるように。ぱっと破り、袋とじを開くと。

一番見たかった二文字が大きく印刷されていた。

「やった……」

勝った。私と、彼の、勝利だ。

「ねえ、『黒板』……見てよ、受かったよ……あなたのおかげだよ……」

黒板を見上げた瞬間に、涙が出てきた。絶対無理だと思ったのに。彼が、私に奇跡をくれた。

「だからさ……お願い、顔を出して。声を聞かせて。一緒に喜んでよ……」

声にならない叫びが、誰もいない教室にこだまする。どうして、彼は出てきてくれないの？ 嬉しいはずなのに、さみしさだけが心に残る。なんで、なんで？ どうして声も聞かせてくれないの？

私は衝動に任せて、彼が出てこない黒板本体を殴りつけようとした。でも、その力

が寸前で抜けて、ぺちゃんとしたパンチが黒板に届く。

その時だった。

「聞こえているよ」

声が……聞こえた！ どこから？ 私は教室を見渡す。しかし声はもう聞こえない。泣き疲れて朦朧となった頭で考える。もしかして……。

私は、黒板に手を触れた。

「おめでとう」

彼は、生きていた。まだ、この世にいたんだ。体の中に溜まっていたさみしさが、全て取り除かれていく。両手を黒板につけて、乗り出すような体勢になって、私は言いたいことを絞り出す。

「どうして……返事をしてくれなかったの？」

まだ半泣きの私に、彼が答える。それは、非情なものだった。

「もう、僕は外に出られないみたいだ」

「どういう……こと？」

「多分、寿命だよ」

じゃあやっぱり、彼の姿が薄くなっていったのは気のせいじゃなかったんだ。

「毎日の実体化が、思いのほか、僕の寿命を削ってたんだと思う。それはきっと、魂を本体から出し入れするってことだから。本来、一度出たら戻らないものを強引に自分に戻してるわけで、負担がないはずがなかったんだ。根拠のない話だけけど、実感としてあったから多分間違いじゃない」

朦朧とした頭でも、納得できた部分もある。だから彼が本体の外にいる時、いくら字を書こうとしても、チョークの粉は落ちるだけだったんだ。

「普段の仕事にも、だんだん疲れを感じるようになった。実体化した時の僕の体が薄くなっているのは、実は一二月くらいから分かってたんだ。気のせいかもしれないけど、あの日君からそのことを言われて、いよいよまずいかもって思ったよ。力には相応のデメリットがあるってことだね」

知らなかった。まさか彼が命を削って私の前にいたとは。いや、結果的に私が、彼の未来を削っていた。そのことの罪悪感に押し潰されそうになって、足から力が抜ける。彼に顔を向けられない。私はごめん、ごめんと彼に背中からもたれかかると、彼は私に優しい声をかけてくれた。

「いや、君のせいじゃないよ。僕が考えて自重すればよかった話なんだから。君の受験が終わるまでは、頑張ろうと思った。ちょっと前に、目標の話をしただろう？ これが、君に秘密にした、三つ目の目標なんだ」

冬休み前に交わした会話が、脳裏に浮かんでくる。彼が掲げた三つの夢の一つに、秘密にしていたものがあつた。この頃からもう彼には、黒板としての死が近づいている実感があつたんだ。

「あの朝、君と会った後、本体に戻ったんだ。それ以来外に出れなくなってしまった。突然力を失くしたみたいな感覚だったよ」

「じゃあ……なんで返事をしてくれなかったの……声は出せなかったの……？」

ここまで来ても、まだ文句を言う私は、きっと悪い子なのだろう。でも、唇からいったん溢れ出した思いは、もう止めることができなかった。彼は、私のそんな思いなど、気にしていないようなそぶりで答えてくれた。

「ずっと話しかけていたさ。君が試験から帰って来た時も、お疲れ様、って言ったんだ。さっきだって、君の合格を見ておめでとうを言ったんだ。言ったつもりだった。でも君には聞こえていなかった。君に触れてもらわないと、声が伝わらないくらいに弱っていたなんて、今初めて気付いたよ。どうやら、一つ目の目標だった、二番目の君を見つけるっていう目標は、叶えられそうもないや」

いろいろなことが一度に起こりすぎていた。今の私の混乱した頭では、全てを理解することはできなかった。しかしその中で確実に分かったことが一つある。

彼はもう、長くないんだ。

私は彼に向き直る。そして、消えそうな声で彼に聞く。

「死んじゃうの？」

「そうだね」

彼は淡々と答える。もう自分でも覚悟ができているんだ。

「だから、最後の仕事を済ませた」

「なんで？ 消えそうなのに何仕事なんてしてんのさ！」

私は思わず、触れていた手で黒板を叩きつける。それ以上何を頑張ろうっていうのか。私には分からなかった。そこまでしてやり遂げないといけなかった仕事って何？

「自分に限界が来たと感じたら、もう限界ですってシグナルを出すんだ。人間に伝わるようにね。そうして買い換えてもらうんだ。これが、全ての道具の最後の仕事」

以前先生が言っていた、チョークの乗りが悪い、というのはこういうことなのか。私はそこは理解できた。でも、考えても分からないことがある。自分で自分の死を認めるようなことをするなんて……どうして？

「君は、僕が自分で自分の首を絞めたと思っているだろう？」

「どうして分かったの？」

「君を見れば分かるよ。僕は、そんなに悲観していない。少なくとも君よりはね」

彼の言っていることが、よく分からない。彼の真意について悩んでいると、彼は一人で言葉を繋ぐ。

「僕は、人間が好きなんだ。だから、壊れるまで使われて、実際に壊れて、人間に迷惑をかけたくないんだよ。僕が倒れてきたら、危ないだろう？」

「確かに……そうだね」

「もう、買い換えが決まっているらしい。明日、休みを使ってここに電子黒板とやらが来る。一目見てみたいものだね。僕の後継なんだから、さぞすごい奴に違いない」

無情なくらい、彼との別れは急だった。私と彼は、今日でお別れ。私はまだ人生が残ってる。でも彼は、もう黒板としての役目を終えて、スクラップになるだけ。なのに。

「どうして、そんなひょうひょう飄々と言えるの……」

彼はうーん、と悩んだけれど、すぐに答えを出した。

「僕はね、君と笑って別れたいんだ。今まで五回、僕は三年の卒業を見てる。でも、みんな泣いて卒業していった。会えなくなるのがさみしい、嫌だって言って。おかしいよね。絶対笑ってお別れの方がいいのに。その方が前に進めそうな気がするのに。どうして僕でも分かることが、人間に分からないのかな」

……分かっているよ。そんなこと。みんな知ってるんだ。でも、できないんだよ。分かっているよ。さみしいんだよ。笑顔でいようと、思えないくらい。

「君には感謝しているんだよ」

彼は、いきなり私に感謝の台詞を言ってきた。私は驚いて、なんで、と聞こうとした。だけど、その言葉が出てこない。

「君に会えたから、僕は人間が好きになれたんだ。いろんなことも知れたしね。君に会ってからの半年間は、今まで過ごした一五年間より長く感じた、楽しかったよ」

突拍子もない告白に、返事が出てこない。彼が続ける。

「だから、最後まで楽しい思い出にさせてほしいんだ。これが、僕の最後の願い」

彼に残された時間は少ない。目の前は行き止まりで、後ろにも戻れない。後は死を待つだけ。なのに、彼はそう願っていた。全ては、今のために。

私は、彼に背を向けた。今にも決壊しそうな涙腺をとどめてから、彼の方に向き直る。形にすらなっていない、引きつった、無理な笑顔を作って、彼の体に、額をつける。

「笑えるじゃん。合格おめでとう」

「ありがとう……嬉しいな」

私たちは夜までいろいろなことを話した。日付が変わっても、思い出話を続けた。そして、気付けば太陽が昇っていた。

「もうすぐ、工事の人が来る」

「まだ朝だよ」

「朝から始めて、そのままいろいろいじくるみたい」

お別れの時間が、近づく。私は合格通知をポケットに入れて、彼の入った黒板の前

に立つ。私は、彼にまた両手を触れた。  
「最後に、一つ言いたいことがあるんだ」  
私は、彼に耳を寄せる。彼が囁いた。  
「僕は、黒板に生まれてよかった」  
我慢していた涙が出る。お別れの実感が、私に襲い掛かる。でも私も、彼に言いたいことがあった。頑張って、また笑う。  
「今まで、お疲れ様……ありがとう」  
そう言って、私は彼から手を離す。彼の声が聞こえなくなる。私は走って、教室を出た。  
本当は、もっと伝えたいことがあった。もっともっと、ありがとうを言いたかった。でも、もうダメだった。これ以上彼の前にいたら、笑えなくなってしまいそうだったから。

彼と話せた理由が、分かった気がした。  
彼は、人間と話をしたかった。話をしたくて、気付いてほしくて、実体化するまでになった。でも、誰にも気付いてもらえなかった。  
私は、黒板が話せたらいいのに、と思った。  
私たちは、同じ願いを持ったんだ。だからきっと、私が選ばれた。特別だったのは、私じゃなくて、きっと、彼の方だ。だって彼は、一人で実体化までこぎつけているのだから。  
彼を話したいと願った人が、私の前に一人でもいたならば、きっと彼はその人と会話できたはずだ。彼が話したい、と思ってから五年もの間、誰もそれを思わなかったとすれば、私も驚きだ。  
だけど、もしも私の考えが合っているのなら。  
彼と初めて話せたのが、私でよかった。  
この考え方にも、根拠なんてものはない。でもきっと彼ならこう言うだろう。  
「こんなことに根拠を求めることこそ、間違いだと思わないかい？」

彼と別れてから一日経った後、もう一度、彼のいた場所に行ってみた。休みの間は、学校は工事で立ち入り禁止になった。だけど、こっそり忍び込んだ。教室には、彼も、彼の本体ももういなかった。代わりに、ホワイトボードみたいな電子黒板が、教室の最前列で輝きを放っていた。  
私は電子黒板に手を触れる。声は、聞こえない。彼はもういない。そう実感して、また泣きそうになるけれど、彼の姿を思い出して必死にこらえた。彼のことで、もう泣かないと決めたから。  
ポケットで、携帯電話が鳴った。朱莉からだ。きっと、昨日のうちに連絡しなかったから、心配しているだろう。  
「もしもし、朱莉？」  
「うん、私。朱莉だよ」  
朱莉の声は消えそうだった。やっぱり、心配されているみたいだ。もしかしたら、落ちたショックで電話できなかった、と思っているかもしれない。  
「ごめんね、昨日のうちに電話できなくて。安心して。私、受けました！ 朱莉は？」  
「ほんと！ よかった。よかったよう……」  
電話の向こうで、朱莉は泣き出してしまった。  
「私も……合格したよ。二人そろって……よかった……」  
「そうだね！ 私たちに、おめでとう！ またいっぱい、お話しようね……」  
その時、私の目から一筋、涙が零れた。嬉しくて、耐えられなくて、大声をあげて、たくさん泣いた。きっと、悲しい時に我慢した分、嬉しい時に、涙が出るんだ。  
今はきっと、涙を流せなかった彼の分まで。

そして、私は中学を卒業した。

「でも、よくここまで上がったね、成績」

「本当にそうだよ。いやー、頑張ったわ、私」

彼がいなくなって約一ヶ月後。念願かなって高校生になった私は、こんな軽口を叩いている。隣には朱莉もいる。芸術科に入った朱莉は、渡された授業計画が理論ばかりで、絵が描けそうにないのを不満に思っているようだ。本当に、描くのが好きなんだね。

受験勉強の話をした時には、朱莉も、私の成績の上がりっぷりには驚いていた。本当はおバカになっていたのを、隠していたことを、朱莉に糾弾されたけど。「私に相談してくれればよかったのに！」って。優しい友達を持てたことが、ただ嬉しかった。

そしてもちろん、この高校に来れたのは彼のおかげ。だけど、朱莉にも、彼とのことは黙ってある。とりあえず、いい家庭教師が来てくれたことにした。大して間違っていないし、そもそも彼との話なんて、誰も信じてくれないだろう。

高校に入って真っ先にやったことは、学校中のモノというモノに話しかけることだった。もしかしたら、彼のような、人と話したい、と思っている道具がいるかもしれない、そう思ったから。ただ、今のところは見つかっていない。

「ああ、そういえば」

「何？」

突然何かを思い出したように、朱莉が聞いてきた。

「宿題の作文、何書く？ 今更『将来の夢』なんて、変な学校だよな」

入学してすぐ、原稿用紙を二枚渡されて、作文を書いてこいとの宿題を貰った。芸術科である朱莉にも出された課題ということは、どうやら新入生共通の課題らしい。正直、作文自体は面倒くさい。でも、書くことはもう決まっていた。

「私さ、先生になりたいんだ」

「どうしてそう思ったの？ あ、その家庭教師に憧れたんだ」

「……うん、そんなところかな」

別に、彼の生まれ変わった時の夢を代わりに叶えたい、とかそういうわけではない。もっと純粹。ただ、私になりたいのだ。彼みたいな、先生に。

もちろんハードルは高いよ。分かってる。私はみんなよりバカだから。でも、諦めずにやって行こうと思うんだ。彼と過ごした日々のように。

そう私は、彼との思い出に語りかける。

[戻る](#)